
空を駆け巡る者たち

Douke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を駆け巡る者たち

【Nコード】

N3338Y

【作者名】

Douke

【あらすじ】

夜、静かな街で。背中に紅い翼がある少女と、屋根を駆け回る少年の姿が……。

プロローグ

暗くて寒い、夜の街。

四月に入ったばかりで、桜がようやく咲き始めたばかりだというのに、いまだに冬を感じさせる冷たい風が吹いていた。

時刻は午前一時。そんな遅い時間に、家の屋根を飛び移りながら移動する少年の姿があった。

「うっ、寒いよ……。なんでこんな日に出てくるかな……」

歳は高校生ぐらいだろう。その両手には右に白、左に黒と異なる短剣を持っていた。

少年は屋根の上を移動しながら、その視線は空に向けられていた。その視線の先には、地上から約三百メートル離れた上空で、戦闘が行なわれていた。

暗い空よりも黒いもやのような物体と、背中に紅く輝く翼があり、槍を持って目の前にいる物体と戦う少女。

少年はいま戦っている少女を見たことが無かった。

おそらく新しくスカウトされた新参者が、はたまたただの通りすがりか。

けれど、少年にとってはどうでも良かった。

問題なのはどうやってあそこまで行くかだった。

「香里みたいに、僕もウィンドが使えたらいいのに……あっ！」

少女の翼のせいでよく見えなかったが、少女の動きに変化があった。

さっきまで槍を振り回したり、突いたりしていたのに、急に自由に動かせなくなっているみたいだった。少し場所を変えて見てみると、槍の先端が黒い物体に掴まれていた。

このままだと、少女はやられてしまう。

「まずいつ！」

少年は右手に持っていた短剣を腰にある鞘にしまい、ポケットか

ら直径三センチほどの鉛玉とどこにでもある長いワイヤーを取り出した。

そして少年はやられかけている少女の元へと、高く飛んだ。

しかし、いくら少年が力の限り飛んだとしても、空で戦っている少女の元に半分しかたどり着かなかった。

けれど、少年にとってはそれで充分だった。

飛んでいる間にワイヤーに鉛玉を巻きつけ、それを黒い物体に向けて投げた。

鉛玉付きのワイヤーが、黒い物体の一部分に絡まったのを確認した瞬間に、少年は地上に落ちる重力も利用して、思いっきりワイヤーを引っ張った。

不意打ちに行なった為、すぐには反応できなかった黒い物体は、上空から一気に地上へと落ちた。

しかし、少年にとって予想外の事が起きた。

黒い物体は、あまりにもいきなりだったからか、少女の槍を掴んだままだったため――。

「きゃああああ!？」

――一緒に少女も、地上に落ちてしまった。

「あ、しまった……」

急いで黒い物体と少女が落ちていった場所に向かって行った。

黒い物体と少女が落ちた場所は、この辺りでも大きい公園だった。少年が公園に着いたとき、少女は地上に落ちる直前で体勢を整え

たらしく、怪我や打ち身などはしていなかった。

「な、なんなのよさっきのは？」

「あ、あの……大丈夫ですか？」

おそろおそろ少年が声をかけてみると、少女は少年を睨みつけた。

「……まさか、さっきのあんたの仕業？」

「う……そ、その、ゴメン。巻き込むつもりは……」

「邪魔に来たのなら、今すぐ退きなさい。あんな奴、あたし一人で充分よ」

そう言って、再び翼を広げて少女は飛び立とうとした。

少年は急いで少女の腕を掴んで止める。

「何よ？」

「い、いや……ここは僕たちの担当地区だし、そ、それに君、ボロボロだよ？」

暗かったのでよく見えなかったが、少女の服はあちこち破けていて、少女自身も擦り傷だらけだった。

「そんなの関係ないわ。あれはあたしが見つけたんだからあたしの獲物よ。それに、こんなの全部かすり傷よ」

「そ、そうかもしれないけど、僕たちにも仕事しないといけないし……」

少年は少女の剣幕におどしていたが、少女はある事に気付いた。

「……？ あんた、あたしと同じ同業者のはずよね？ なんで翼が無いわけ？」

「あ、えっと、これには少し深いわけが……っ！」

少女は少年を見ていたため気付かなかったが、どこかに隠れていたさっきの黒い物体が鋭い爪を立てて、少女を後ろから襲おうとしていた。

「危ない！」

少年は急いで少女を横に突き飛ばす。

本来、少女に振り下ろされるはずだったその爪は、そのまま少年の体を切り裂いた。

「……………え？」

突き飛ばされた少女には、目の前で起こった光景がすぐには理解できなかった。

少年の体は、左肩から腰まで斜めに深く切り裂かれた。その傷は、心臓や肺、その他の臓器も抉られていた。

口から込み上げてきた血を吐くと、その場にゆっくりと倒れ——少年は死んだ。

パート1 朝の登校

「あーねむ……」

昨日、いや時間からしたら今日か。

まあどっちでもいいけど、あんな夜中に仕事したから少し寝不足になってしまった。

だからと言って、入学式に遅れるわけにはいかない。

一昨日届いたばかりの制服に着替え、筆記用具などを鞆の中に入れる。

そして、『竹川亮一』と書かれた生徒手帳をポケットに忘れないように入れる。

俺が通うことになる高校は、この生徒手帳が無いと中に入れないという、かなりセキュリティが高い学校だ。もしこれを無くしてしまうと、めんどくさい手続きをしないといけないうえに、欠席扱いされてしまう。

準備が整って、キッチンで朝食用のパンを焼こうとした時、俺のケータイにメールが届いたと知らせる着信音が鳴った。

こんなまだ朝早い時間にメールしてくるのは、あいつしかない。

ケータイを見てみると、予想通り『佐藤香里』と画面に表示されていた。

ちなみに内容はこうだ。

『亮ちゃん、ちゃんと起きてる？』

「……ったく、いちいちメールしなくても平気だったのに」

世話焼きな幼なじみに苦笑しながら、きちんと起きていると伝える。

このまま返信をしないと、メールと電話のオンパレードになるかな。

返信メールを打っていると、キッチンに俺の枕を抱きながら入っ

てくる女の子が。

「……………」

「お、起きたか。お前も一枚食べるか？」

「……………うん」

こいつは鈴木瑠璃。この家の居候、というか俺がある事情で拾ってきた子だ。

ついさっき起きたばかりらしく、眠い目を擦りながら瑠璃は答えた。

「……………学校、今日からだっけ？」

「ああ。お前はどつする？ もう少し寝てるか？」

「……………いい。亮一が行ってる間、家事とかしてるから」

「そうか、ありがとな」

そう言いながら頭を撫でてやると、瑠璃は気持ち良さそうに目を閉じてそのまま――。

「……………くー」

「寝るなー！」

家を出て、五分くらい歩いたところにあるコンビニで、香里と一緒に学校に行く約束をしていた。

俺が着いたときには、すでに香里の姿があった。

「悪い。待たせたか？」

「ううん。私もさっき来たばかりだから」

「……………嘘、なんだろうな。」

こいつとはもう十年以上も一緒にいたから、どうせ待ち合わせ時間の三十分も前からここにいたんだろう。

だけど、それは香里がそうしたくてしたわけだろうから、俺は何も言わなかった。

「それより親父から聞いたぞ？ お前、生徒会の一年会長をする事

になったって」

「もう聞いちゃったの？ まったくあの人は……」

頼に手を当てて溜息をつく香里。

俺が通う高校、その名も『藍瀬久学園』は私立高校にしては学費が安く、設備が他の高校よりも整っているの、かなりの人数が入学してくる。

そのため、いろいろと厄介ごとが毎年起こるらしい。

その対策として、生徒会を各学年に分け、少しでも減らすことにした。

生徒会長をやらされる条件は、その年の入学試験でもっとも優秀な人が選ばれる。

今年は香里が選ばれたみたいだけど、まあある意味当然だと俺は思っていた。

なんせ香里は成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群と、まるでどこぞの小説かのように、どこから見ても完璧超人だからだ。

おまけに俺と同じ同業者で、実力は俺よりも上だ。

ちなみに余談だが、俺の父親は藍瀬久学園の校長を勤めてたりする。

「あ、あと昨日のことなんだが、本部の方から新しい同業者が来るって連絡あったか？」

「本部から？ 別に何もなかったけど……。後で私が確認しておこうか？」

「いや、報告書出すと同時にその事についても書いておいたからいいよ」

「……そういえば聞くの忘れてたけど、昨日会った時と人格が変わってるのはどうして？」

「……ま、まあ、ちよいと油断したみたいだな……」

「……あとで、きっちり報告書読ませてもらうからね」

そんな会話をしながら、俺は昨日会った少女の事について思い出していた。

あいつ……いったいどこから来たんだ？

世の中には、平穏な日常を生活している裏で、毎日人々を守るために仕事をしている者たちがいる。

その者たちの事を、俺たちは『言霊使い』と呼んでいる――。

パート2 入学式

『言霊使い』

この単語を知っている人は、世界でも数少ない。

言霊使いとは、言霊で作られた自らの翼で、武器で『グチ』と呼ばれている敵を倒す。

辞書で言霊を調べてみると、言葉に宿っている不思議な力と出てくる。が、その言霊とは少し違う。

俺たちの言霊というのは、形となる想像を頭の中で描き出し、言葉として出す事で実現させる。

そしてグチ……。勘のいい人はすぐ分かるかもしれないが、漢字で愚痴と書く。

つまり、人間から生まれた愚痴を言葉で解決させる。

人間がよく呟く愚痴は、自分でも知らない内に溜まっていき、それが現実に実現してしまうことがある。

その形は様々だけど、一番の特徴は大きさだ。

溜めた愚痴に対するストレスが大きければ大きいほど、その形は膨らんでいく。それはもう、テレビ番組で出てくる怪獣みたいに。

その無意識に出てくるグチを倒すのが、さっきも言ったが言霊使いの役目だ。

とまあここまで正義のヒーローみたいに言ってみたが、実際言霊使いをしている理由はグチを倒す事によって、政府から多額の賞金がもらえるからだ。

しかし、その分危険も伴うし、政府も多額の賞金をあまり多人数に渡すとすぐに国は破産してしまうため、言霊使いをやる人も知っている人も少ない。

そして、俺たちはお互いのことを仲間と呼ぶのではなく、同業者と呼んでいる。

「皆さんこんにちわ。この度一年生徒会長に選ばれました高橋香里です」

入学式。

いま舞台では香里が生徒会長として挨拶をしていた。

周りの俺以外の生徒達は、香里の美貌にどうやら見惚れているようだ。お、あいつなんかは一目惚れした表情だな。

まあ俺はほぼ会っているから、どうとも思わないけど、意外と香里の声って綺麗だったんだな。

いつも聞いているはずなのに、まるで香里の知らない一面を見たような気がした。

香里の挨拶が終われば、あとはもう自分のクラスに移動するだけだ。親父から事前に聞いていたので、わざわざ職員室の横にある掲示板まで見に行かなくて済む。ちなみに俺と香里は同じクラスだ。

今日は明日やる事についての説明ぐらいなので、早く帰れて昼ぐらいか。途中で昼飯を買って帰るとするか。もし瑠璃が作ってくれたとしたら、その時は全部食べればいいし。

「亮ちゃん、私の挨拶どうだった？」

「良かったと思うぞ。これから大変そうだな」

「？ どうして？」

だって、お前に告白してくる男子がたくさんいそうだからな。

「まあそれはともかく、香里は学校が終わったあとどうするつもりなんだ？」

「少し生徒会に呼ばれてるから、終わってもしばらくここにいたいと思うよ」

「分かった。じゃあ待とうか？」

「ううん。亮ちゃんは先に帰ってていいよ。瑠璃ちゃんのことがあるし」

それなら、そうさせてもらおうとするか。

クラスに着くと、まばらだがもう人が来ていた。

中には中学のときに学校が同じだった人や、他校から来た見知ら

ぬ人もいる。

他にも昨日、見覚えがある人とか……。

「……あれ？」

「な、なんであんたがここにいるのよ!？」

何故か、昨日の夜に出会った同業者である少女の姿があった。

パート3 屋上

「……亮ちゃん、知り合い？」

「あー昨日、仕事でちよつとな……」

首を傾げて聞いてくる香里に、俺は戸惑いながらも答えた。

つか、なんでこいつがここにいるんだ？

「えっとだな……。ここじゃお互い話しにくいから、後でゆっくり話さないか？」

「……そうね。あたしも、いろいろ聞きたい事あるし」

とりあえず案を出してみたら、なんとか賛成してくれた。これでひとまずは大丈夫だな。

問題なのは、どこで話すかなんだが……。親父に頼んでみるか。ついでにこいつの事について聞きたいし。

そんな事を考えている間に、他の生徒達がどんどんクラスに入ってきて、担任の先生がきてホームルームとなった。

ホームルーム終了後、香里は生徒会の方に行き、俺は小口美野里と名乗った女子と一緒に、屋上にいた。

ここなら誰にも聞かれる心配はないし、何かあった時にすぐに逃げる事が出来るからな。

ちなみに鍵は職員室から勝手に取ってきた。親父から許可を取ろうと思ったけど、出張でいなかった。

「じゃあ、まず自己紹介からするか。俺の名前は竹川亮一。この地区を担当している」

「……あたしは小口。小口美野里よ」

「とりあえずまず聞きたいのは、お前はこの地区に新しく派遣されてきた同業者か？」

「……ええ、そうよ」

やっぱりそうなのか。だとしたら、前もって連絡が来るはずなん

だけだな……。

「あたしからも、あんたに聞きたい事があるんだけど」

「俺にか？」

「そう。……あんた、なんで生きてるの？」

「……いきなり、人の個人情報を知られるってのはあまり気分がい
いもんじゃないな。」

でも、その疑問ももっともなのはそうなんだけど。

確かに俺は、小口の代わりにグチの攻撃を受け、死んだ。

けど……俺はそう簡単に死なない。

「言霊使いには、一人ずつ能力が使えるのは知ってるよな？」

「？ そんなの誰だって知ってるわよ。それがどうしたの」

「つまりだ。俺の場合はその能力のおかげで今もこうやって生きて
るわけだ。理解できたか？」

「……あんた、あたしの事バカにしてるでしょ？」

あ、ばれた。

「もしそれがあなたの能力だとしても、回復能力なんて聞いた事がない」
「ない」

それはそうだろ。俺だってそんな能力聞いた事がないんだから。

「ああもう……それより昨日受けた傷を見せなさい！」

「どわっ!？」

いきなり小口は、俺のことを押し倒してシャツのボタンを外し始
めた。

「ちょっ、おいやめろ!」

「……何よ、これ」

小口の目にはこう映っただろう。

日々の鍛錬を続けて鍛えられ引き締まった体。

昨日受けた傷どころか、生傷や古傷がまったく無い体が。

「こんなの……有り得ない。同じ同業者なのに、なんで……」

「あー考えてるところ悪いんだが、そろそろどいてくれないか？
重くて息がしづらい」

「なつ……！　じよ、女子に向かつてなんてこと言うのよこの化け物！」

「おまつ、化け物はひでーだろ！　俺はお前を助けてやったんだぞ！？」

「そんなの頼んだ覚えは無いわよ！」

「そんな風にぎゃーぎゃー騒いでいると、空から何かが降って来た。つー！」

俺の上に乗っかっていた小口はすぐに反応してその場から逃げたが、押し倒された俺は逃げる事が出来なかった。

空から降ってきたのはすべて投擲用の小太刀が計十本で、全てぎりぎり体に当たらない所に突き刺さった。しかも、この小太刀を使う人物を俺は知っている。

「……大丈夫、亮一？」

「瑠璃、お前俺にこの小太刀が刺さるとか考えなかったのか？」

「………無事で良かった、ね」

「明らかに考えてなかったんだな。今日の晩飯のデザート抜きにするぞ」

屋上に降り立ったのは、家で家事をしているはずの瑠璃だった。

その背中には言霊で発現させた翼——『ウインド』が。おそらくウインドでここまで飛んで来たんだろう。

いや、それよりも気になることがある。

「なんで、わざわざ飛んでここに来たんだ？　屋上にいるなんて伝えてないはずだぞ」

「………亮一が押し倒された気がして。そのままいちゃいちゃしてる気がして」

「うん、そのセリフさえなければカッコいいんだがな」

かと思つたら、今度は屋上の扉が勢い良く開かれた。今度は香里が息を切らしながら入ってきて、

「亮ちゃん大丈夫！？　他の女から押し倒された拳句、そのままいちゃいちゃしてない！？」

「一体お前らはなんなんだ！ エスパーかよ！」

そう叫んだところで、小口の事が気になって見てみると、彼女はウィンドを発現させ、

「……ずいぶん、慕われてるのね」

「あ、ちよつと待て！ 話はまだ——」

俺の言葉も聞かずに、小口はそのままどこかに飛んでいってしまった。

パート4 夜、グチとの遭遇

その日の夜。

俺は瑠璃を連れて街のパトロールに出ていた。

グチが出てくる時間帯は基本夜。普段ならもう眠っている時間帯に、俺と瑠璃は屋根の上を移動していた。

「どうだ？ グチの気配感じるか？」

「……………うつん」

ウィンドを使って飛んでいる瑠璃に聞いてみるが、まだグチは表れていないみたいだ。

けど今日は確実に現れるはずだ。なぜなら昨日現れた人型のグチ。あれは予兆みたいなものだ。

つまり今日こそが本命……………。

「ただ、その事をあいつが知ってる……………わけないか」

もちろん、あいつとは小口のことだ。

あの様子だと今日もグチを倒すために動いていると思うんだが……………。

「……………亮一！」

「グチか！ 場所はどこだ！」

「……………ここから西の方向に！」

「まったく……………一体なんだったのよ」

そのころ美野里は、亮一の予想通りグチを探すためウィンドで飛んでいた。

彼女が言っているのは、昼間屋上であつたことだった。

亮一の訳の分からない能力。突然乱入してきた二人の女。おそろく同業者だろう。

そして……………彼はその二人から、信頼されている事。

美野里は中学の頃から、委員長や班長などといったリーダーシップを取る事が多かったため、周りから信頼されているか人一倍気に

していた。

そのため、他人の信頼関係を把握することが出来るようになっていた。

彼女に取っては信頼されていることが――。

「……何考えてんのよ、私は。今は生活費を稼ぐのに集中しないと」
そう呟いた時だった。

いきなり、目の前に黒い壁が現れた。それに気付いた瞬間には、横から強い衝撃を受け美野里は吹き飛ばされた。

「がつ……！」

あとはそのまま地上に落ちて、第二の衝撃を待つだけだった。
どんっ！

(……………え?)

美野里が思ったより、衝撃は強くなかった。それに、硬い地面の
はずなのに柔らかかった。

「……つつー。何油断してんだ？ 昨日の戦いを見る限り、もう
ちょっとやれる方だと思ったんだが？」

「な、あ、あんた……なんでここにいるのよ!？」

俺と瑠璃が来た時には、小口はグチからの攻撃を受けたところだ
った。

「俺が助けに行くから瑠璃はグチを引き付けてくれ！」

「……………了解」

急いで走って、屋根を飛んだがこのままだと間に合いそうに無か
った。

「右に破滅を、左に希望を！ 光と闇をつかさどりし我が双剣よ！」
俺がそう叫ぶと、右手に黒く輝く剣。左手に白く輝く剣が現れる。
これが、『言霊』だ。

今のは発現コードと言って、武器やウィンドを出すために必要な
言葉だ。

ただと言霊は一人に二つの武器しか出す事が出来ない。

それを補うために、言霊で発現させた武器には能力が付いている。
「戦士の魂をこの身に宿せ！」

右手に持っている黒い剣は黒いオーラを出し、俺の体を包み込む。
この能力は一時的に身体能力を上げる。

つまり、これを使えば届かないはずの距離を一瞬で移動する事が出来る。

「くっ！」

それでもかなりぎりぎりだった。もしそのまま地面に叩きつけられていたら、骨折どころの話じゃなかったぞ、おい。

「な、あ、あんたなんでここにいるのよ!？」

「そりゃここは俺らの担当地区だからな。いて当然だろ」

そうやって話している間も、空では瑠璃が一人でグチを相手に戦っている。

まあやられるとは思ってないけど、多分本気出してないだろうかな……。

「つーか、お前一人でアレは無理だ。チームワーク出していこうぜ」

「ふざけないで！ あんなのあたしひと、りで……」

小口はグチの姿を見た瞬間、絶句した。

そのあまりにも大きすぎる大きさに。

例えるなら高層ビル。あるいは東京タワー。あるいはテレビに出てくる怪獣。

ここでグチの標準大きさを説明しておこう。

通常、というかこの地区以外の地区だと、グチの大きさは初めは猫や犬くらいの大きさ。それが成長していくと、人と同じくらいの大きさになる。それよりは決して大きくならないと言われている。だというのに。

いま俺たちの目の前にいるグチは、そんな普通の言霊使いの常識を打ち破るサイズだ。

とはいえ、普段からこのぐらいのサイズは、俺たちにとっては日常茶飯事となっているけど。

「なに、これ……」

「あれ、お前この地区のことについて何も知らないで異動させられた？　ここは常識や期待を全て巨大にさせてしまう地区——通称、

『何でも巨大にしよう地区』なんだよ」

「何その変なネーミング!？」

まあ、それは俺も思っけどさ……。

パート5 夜ぐちとの戦闘

「まあ実際はグチや俺ら言霊使いに影響が及ぶ地区なんだよ、ここは」

そう言いながら俺は携帯電話を取り出すと、ある場所に電話をかける。すると三秒も経たない内に繋がる。

『はい、こちら言霊センター略して言センの受付担当の相川渚です。年齢は24歳。誕生日は七月十三日。出身地は北海道で……』

「あー渚さん？ いまこっちは忙しいから早くしてほしいんだが」

『最後まで聞きなさい。あと一言だけです』

「そうなの？ じゃあさつさと……」

『趣味は、人を苛立たせる事です』

「趣味悪っ!？」

……とまあ、この変な人はこの地区の担当している俺たちのサポート役である、相川渚さんだ。

サポートと言ってもグチを探すだとか、そういうサポートではない。

「それより、今俺がいる辺り半径一キロに結界を張ってくれ!」

『めんどくさいですね……』

『いや職務放棄しないで!』

『分かりました。やればいいんでしょ、やれば』

「少しはやる気出してくれよ……」

『うお——っ!』

「い、いきなりやる気に!？」

『あ、いえ。ようやくラスボスを倒す事が出来たので』

「仕事しろー!」

『というか、もう張ってありますが?』

「はやっ!？」

まあともあれ、これでいくら暴れようと街には被害が無くなった。

思う存分暴れる事が出来る。

「いつ、いつたい何を……」

「事情はあとで説明だ。今はこいつを倒す事に集中しろよ!」

小口はまだ困惑していたようだが、さすがは言霊使い。すぐに目つきが変わった。

「……ほんとに、後で全部答えてくれるわよね?」

「ああ。まあ、俺じゃなくあいつが答えてくれると思うさ」

「あいつ?」

「来るぞ!」

瑠璃がひきつけていたはずのグチが、俺と小口の方に向かって倒れてきた。

早めに気付くことが出来たから、なんとか押しつぶされずに済んだ。

「……… 亮一、大丈夫?」

手に鎌を持っている瑠璃が、心配そうに俺の傍にやってくる。

「おい瑠璃、ちゃんと抑えといてくれよ」

「……… ゴメン」

「まあさすがにこんなデカブツを一人じゃ——」

「……… 亮一が他の女といちゃいちゃしてたから、つい」

「してないよな? まずいちゃいちゃしてる要素が見つからないよな?」

とはいえ、これ以上理由を追求しても瑠璃は答えないだろうし、なにより時間の無駄だ。そんな時間があるならこのグチを倒すのに専念した方がいい。

まずは、このグチがどれだけ手ごわいかを調べるところからだ。

近くにあった電柱の上に飛び乗り、そこからさらに跳躍する。戦士の魂を発動しているので、一気にグチの頭らしき所まで飛び上がることが出来た。

「うおおおっ!」

そのまま右の剣で斬りつけるが、もちろんこのまま攻撃してもダ

メージを与えるどころか、かすり傷を負わせることなんて出来るわけがない。だって剣がグチからしたら小さすぎるし、リーチが短すぎるから。

だから、こうする。

「断、斬、剣！」

そう叫ぶと、右に持っている黒い剣の斬る部分がどんどん巨大化していった。

言霊は武器を出すためのキーワードでもあると同時に、イメージを自由に変えるためでもある。

とはいっても、元から武器の種類や形は変えることは出来ないけど、大きさを変えることが出来る。いま俺が叫んだ断斬剣は、黒い剣を巨大化させるための言霊だ。

巨大化した剣は、そのまま振り下ろされグチの右腕を切り落とす！

——ぎよわあああああんっ！！

グチは獣みたいな悲鳴を上げた。

けれど、すぐにグチは右腕を再生させ、空中で無防備になっている俺を攻撃してくる。

「……………させない」

だがその前に、瑠璃が鎌を大きく振りかぶってグチの体を切り裂く。

「はああっ！」

小口もそれに加勢し、素早く突きを繰り出しダメージを与えている。

それをつつとおしく思ったのか、グチはすぐに俺への攻撃をやめ、小口と瑠璃に体中から触手を出してきた。

この再生力と判断の良さ。おそらくはA級レベルのグチだな。

グチにはレベルがあつて、E級レベルが最低でそのままD、C、B、A・S級とどんどん上がっていく。もちろんS級レベルが一番手ごわい。

でもA級レベルはその再生力が高いから、油断は出来ない。

しかもこれだけでかい図体をしているのに、コアや心臓みたいな弱点はない。

となると、力で押すタイプの今の俺じゃこいつを倒すのに、時間が掛かりすぎる。

(……仕方ねえか)

「瑠璃！」

必死にグチの触手を避け続けている瑠璃に向かって、俺は大声で叫んだ。

「——俺を殺せ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338y/>

空を駆け巡る者たち

2011年11月24日22時51分発行